

教育ディベートの意義

I 論題「日本は市民（公民）を育てる教育にもっと力を入れるべきである。是か非か」

II 哲学（論題考察）：子どもに身に付けさせたい学力

『中学校学習指導要領』（平成20年9月）

社会科 目標

広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

- 1 憲法に基づく理想の社会を実現するための公民的資質
- 2 持続可能な社会を形成するために適応・開発する力（知識・技術）

III 定義：市民（公民）とは？

- 1 市民（公民）としての基礎・基本とは？ 「…我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め…国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者」
- 2 市民（公民）として重要なことは？ 「憲法＝人権尊重」「共生＝相互援助」「持続可能な社会（より良くしよう）」
- 3 市民（公民）として必要なことは？ 「話し合い→合意」のスキル

IV プラン：教育ディベートの活用による児童生徒に育める力

- 1 「話し合い（対立）→合意（きまり＝法）」のスキル
 - (1) 話し合い（対立）
 - ① 小学校からの話し合い活動の指導の充実
 - ② なぜ話し合うのか？ 目的は：様々な課題→現状をより良く（プランを示し改革）しよう
 - (2) ディベートの手法
 - ① 論題に対する自分の意見（立場）「是か・非か」「改革VS. 現状」等を決める。
 - ② 個人の（人権）尊重＝意見（立場）で話し合う（発言・発表することが目的ではない）
 - ③ 論題設定→定義→プラン→ブレインストーミング→リサーチ→自分の意見を決める→話し合い（効率と公正）→合意（多数決）のプロセス
 - (3) 合意→全員一致、多数決（少数意見の尊重＝意見として多数派が正しいという理論ではないので話し合いから合意のプロセスで少数派の説得する機会や場が必要である）

『世界大百科事典』

…市民革命を経過して確立された近代議会主義においては、国民のある程度の同質性を前提としながら、各個人の思想や信条は絶対的な真理を体現するものではありえないのであるから、討論によって相手の意見を知り、妥協点を見いだしていくべきであり、それでも意見の一致が得られない場合には、多数決によって相対的にはより客観的な結論を見いだすことが好ましいと考えられるようになったのである。このような多数決原理は、自明の前提として討論の自由、少数者の保護、政治的反対の保障などを含むものであり、議会制によって政治的寛容の原理は制度化され、個人の自由が保障されるようになったといえよう。…

「アメリカ大使館／レファレンス資料室」

…一見すると、多数決の原理と、個人および少数派の権利の擁護とは、矛盾するように思えるかもしれない。しかし実際には、この二つの原則は、われわれの言う民主主義政府の基盤そのものを支える一対の柱なのである。…

- ① 多数決（少数意見の尊重）の原理そのものが、人権尊重の精神（民主主義）を育てる。
- ② 多数VS. 少数で対等な条件で話し合いができる環境をつくることが最も重要である。

2 社会とのリンク→身近（リアル）なところから→「自分のことだ」のスキル

(1) 自分が世の中を変える存在なんだ、という自信をもたせるためのスキル

- ① まず自分の立場を自覚させること。「わからない」「別に関係ない」「どちらでも」等は、自覚のない現状維持の立場。例えば国政選挙の棄権が多ければ「今のままで良い」という強い意思表示、話し合いの放棄なら多数派への意思表示である。
- ② ①の自覚のない現状維持（無関心や無力感が原因で、無自覚のまま知的なエネルギーを一切使うことなく放棄している無内容な状態）を変えること。
- ③ 逆に人柄や話し方、雰囲気、ムード等、論題に対する意見や理由として関係ないことに左右される、いわゆる軽いノリ（根拠のない自信）の意思表示を変えること。

(2) 学力：自立（アイデンティティ確立）と貢献＝社会貢献（市民参画社会）のスキル

- ① 自己肯定力（家庭教育）＝自信「自分が世の中を変える存在なんだ」＝社会貢献（地域教育）
- ② 「自分とは何か」と常に自問し、物事の本質を自分の頭で考えること
- ③ 自分が本気でやりたいことをできることから一歩踏み出すこと

V ブレインストーミング：「ディベートにチャレンジ！」

演習「ブレインライティング」「ラベリング」

新しい社会 公民（東京書籍）P 58～59

3 人権の考え方を使得って社会を見てみよう～ディベートにチャレンジしよう～

- 論題例
- ① 「テレビや新聞などのマスメディアによる報道は、制限されるべきである」
 - ② 「日本は成年年齢を18歳に下げるべきである」

第18回全国中学・高校ディベート選手権（ディベート甲子園）

中学校の部：「日本は飲食店にドギーバッグの常備を義務づけるべきである。是か非か」

- ・ドギーバッグとは自分の食べ残した料理を持ち帰るための容器をいう。
- ・客が店または自分のドギーバッグの利用を希望した場合、店は応じなければならない。
- ・客は自己の責任において持ち帰るものとし、持ち帰りによって生じた問題について店は責任を問われない。

VI リサーチ：教育ディベートの学習とは？

1 証拠資料

全国教室ディベート連盟

- ・客観的・批判的・多角的な視点が身に付く。
- ・論理だった思考ができるようになる。
- ・自分の考えを筋道立てて、人前で堂々と主張できるようになる。
- ・情報収集/整理/処理能力が身に付く。

日本ディベート協会

ディベートで必要となる能力や技術を身につける意義は？

「弁論術は、弁証術における推論がそうであるように、相反する主張のいずれについても説得することが必要とされているからである。だがそれは、相反することの両方を説得することを目指しているのではなく（なぜなら悪いことは説得すべきでないから）、事の真相がどうであるかを見落とすことのないためであり、また、他の誰かが議論の扱いを正しく行っていないときには、われわれが直接にそれに反論できることを目的としているのである。」（アリストテス、「弁論術」1335a）

教育ディベートへの懸念について

ア 批判するばかりの人間を育てる

「何事にも批判的で、文句ばかりいう子供を育てるのではないか」という批判については、そもそも、どのような組織であっても国家であっても、健全な批判は正しい意志決定を行うために、また民主的な意志決定を行うために必要不可欠なものです。批判を許さない社会や組織は全体主義的であり、健全な意志決定を阻害しやすく、人権の侵害につながりやすいと言えるでしょう。また、適切なディベートの訓練を受けた者は、批判する必要があることとそうでないことをすばやく見分ける能力を身につけますので、無駄な批判や反対のための反対はむしろ少なくなるはずです。

イ 自分の意見と異なる主張をさせるのは自我を破壊する

「自分の意見と違うことを主張させることは自我を破壊する」という懸念については、まず、議論に使用する論題が、慎重に検討された抽象的かつ甲乙つけがたい公共的なものに限定されており、思想や信条など、人格に大きな影響を与える主張を強制することを避けていることを理解する必要があります。また、公共的な論題についての自分の持論というべき問題についても、一度ディベートの遡上に載せることで、より一層その問題についての理解が深まることにもなります。一度教育ディベートに参加した人からは、自分のスタンスとは異なるスタンスをとることで、相手側の主張の論拠がよく理解でき、論題に対する自分自身の考え方が深まった、という感想がよく聞かれます。

『中学校学習指導要編解説』社会科編

第1章 総説 2 社会科改訂の趣旨

- (1) 基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得
- (2) 言語活動の充実
- (3) 社会参画、様々な伝統や文化、宗教に関する学習の充実

第3章 指導計画の作成と内容の取扱い

1 指導計画の作成上の配慮事項

- (3) 知識に偏り過ぎた指導にならないようにするため、基本的な事項・事柄を厳選して指導内容を構成するものとし、基本的な内容が確実に身に付くよう指導すること。また、生徒の主體的な学習を促し、課題を解決する能力を一層培うため、各分野において、第2の内容の範囲や程度に十分配慮しつつ事項を再構成するなどの工夫をして、適切な課題を設けて行う学習の充実に努めるようにすること。

2 ディベートを取り入れた中学校社会科の学習

『学校教育の指針』（3）社会（群馬県教育委員会）

児童生徒が自ら見いだした問いの解決に向けて、資料から必要な情報を取り出し、それらを比較・関連付け・総合して考えたことを基に、社会的事象の特色や意味を説明する活動を充実させましょう。

『はばたく群馬の指導プラン』（群馬県教育委員会）

第I章 ぐんまの子どもに伸ばしたい資質・能力

1 確かな学力「社会の課題と、解決に向けて伸ばしたい資質・能力」中学校 公民

- 課題1 様々な視点から考え、社会のしくみの意味を理解することができる
- 課題2 資料の適切な選択、再構成ができる
- 課題3 現代社会の課題とその解決策を考えることができる



(1) つかむ

- ・2の「課題1」や「課題3」は、ディベートの「論題（テーマ）」を設定することに他ならない。社会的な課題や問題点を探ることから課題解決的な学習も始まる。論題を設定することは最も重

要である。

- ・論題が決まったら、話し合いがかみ合うように論題に使われている言葉の意味を「定義」する。まず辞書や用語集を使って調べる。

(2) 追究する

① 追究計画を立案する

- ・「プラン」作成である。理論的には、肯定（改革）側が考えるわけだが、論題に対する定義とプランが決まっていなくて「メリット」「デメリット」を考えにくいので、全員（教師も含め）で考える。
- ・メリット、デメリットでは、両極の意見で極端な見方だと思われがちだが、そうではない。「肯定」、「否定」の立場をはっきりさせて話し合いをすることがねらいである。少なくともその場（ディベートマッチ）では、立場は変えない。必ずしもその立場が自分の意見ではないことが、より一層その問題についての理解を深めるのである。立場を逆にして話し合えること（技能）も大切なポイントである。より「多面的」「多角的」にその論題（社会的事象）に迫るのである。
- ・社会的な事象の特色や意味を考える際に、多面的・多角的な見方をさせることをポイントとしているが、これはディベートの「ブレインストーミング」の段階の学習である。
- ・ブレインストーミングでは、全員でメリット、デメリットを考え、たくさん出し合う。ここでその集団の多面的・多角的な見方の実態がわかる。

② 課題を追究する

- ・課題に対する自分なりの結論（仮説＝結果の予想）をもたせる活動として、ディベートの「立論」のメリット、デメリットの「ラベリング」の学習そのものである。
- ・立論のラベリングは、考え抜いた結論「仮定（結果の予想）」である。メリット、デメリットから選んだ結論である「ラベル」2つをわかりやすい短い一文に表す、ということである。
- ・2の「課題2」は、1つの資料を読み取る視点、複数の資料を比較・関連させる視点、特色や意味を調べる視点を示して熟慮させる。ディベートの「リサーチ（調査活動）」である。ディベートマッチに必要な情報収集で得た資料をまとめる段階である。ハードルの高い学習であるが、根拠となる資料「証拠資料引用」がないとディベートマッチでまったく勝敗のポイントにならないので、必ず必要な資料を探さなければならない。
- ・教師の指導や繰り返して学習をすることでディベートの学習のスキルと共にディベートマッチの勝敗のポイントがわかり、興味・関心が高まり、的を得た意味のある調査活動となる。自然と基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得にもつながるのである。
- ・社会的な事象を観察・調査・分析・解釈する活動や調査活動が十分でなかった。文献調査やインターネット検索等から得た情報を「写す活動」が主になってしまい、言葉の意味がわからないまままで学習が終わってしまうことも多かった。そのため辞書を使って言葉の意味を調べる活動、調べて得た情報を自分の言葉で言い換える活動、調べて得た情報を分布図や年表、表やグラフなどに書き表す活動があげられているが、これらは、まさにディベートのリサーチそのものである。

(3) 考え・まとめる

- ・課題解決的な学習を考えたとき、課題解決能力等の育成に力点が置かれがちで、基礎的な知識・概念・技能を習得という視点が意識されていなかった。そこでまとめの活動を工夫し、追究して得た情報を整理・構造化・図式化する活動等を取り入れる。これは、ディベートのリサーチの段階で、「ディベートマッチ」の発表資料作りである。説得力のある主張は、集めた情報を整理・構造化・図式化した分かりやすく、見やすい発表資料が最も効果的である。
- ・自分なりに考えまとめた結論をレポート等に論述したり、結論の後に、理由や根拠（結論にいたる過程）を加えたりする。また追究して得た情報を構造化・図式化したものを加える。これはディベートマッチそのものである。話し合いはメリットの「発生過程」と「重要性」、デメリットの「発生過程」と「深刻性」で成立しているのである。
- ・ディベートマッチでは、メリットの発生過程と重要性、デメリットの発生過程と深刻性というように論を進める。それぞれに理由や根拠（結論にいたる過程）を加えるが、裏付けとなる理由や根拠はリサーチによって得られた資料を「証拠資料」という形で引用する。きちんとした証拠資料の引用のない説明は、残念ながら勝敗のポイントとならない。

Ⅶ ディベートマッチ：実践例 中3選択「社会」（2001年）

1 テーマ 「ディベートにチャレンジ！」—社会問題をディベートで考えよう—

2 考察

(1) 教材観

① 主な学習事項

選択教科としての「社会」は、中学校学習指導要領社会編「第3 指導計画と内容の取扱い」において「…分野間にわたる学習、自由研究的な学習、見学・調査、作業的な学習などの学習活動を学校において適切に工夫…」とある。つまり、選択「社会」の内容は、原則としては、必修社会科の内容から逸脱しない範囲で生徒の特性に応じて、学習内容、学習方法、学習活動を工夫することが求められている。すなわち選択「社会」では他教科との総合的な内容の学習が可能であり、その学習方法の一つとしてディベートを実践することにした。

また新学習指導要領では、自己の興味・関心に応じて課題を設定し、追究することを通して、社会科に対する興味・関心を高めたり、必修教科での学習内容を補充・深化・統合したり、社会科の学習の学び方を習得したりすることをねらいとしている。

ここでは、ディベートを通して地理的事象や歴史的事象、公民的事象の中からの興味・関心に応じて課題としての「論題」を設定し、追究することで、主体的な学習になるように設定した。

今回の論題「日本は死刑制度を廃止すべきである」は、生徒自らが決定した。死刑制度の存続は、長く議論のある問題である。世界的には廃止の方向に向かっている。経済先進国の中でも死刑制度があるのは、アメリカ合衆国と日本だけである。日本では、死刑の宣告、執行は極めて慎重で、執行件数は以前より減っている。死刑制度の是非を考えることで、必修教科「社会」の内容「民主政治のしくみ」から「日本国憲法と裁判制度」「基本的人権、法と正義」「国家と個人」などについての基本的な理解と関心を深めてもらうことが期待できる。

予想される論点としては、第一に「教育刑か応報刑か」である。刑罰は、人権が高まるにつれて、犯罪者の矯正を目的とした教育刑へと転換してきた。その中で死刑のみが応報刑としてやむをえない場合に限って適用されている。やむをえない場合とは、犯罪者の改善が不可能だと思われるときである。

第二は、「抑止力があるか」である。死刑に犯罪を防止する力があるかどうかである。多くの国で様々な調査が行われてきたが、決定的な結論は出ていない。

第三は、「誤判の可能性」である。万が一死刑が誤判だった場合には、執行後の回復が不可能である。1975年に再審請求の門が広がってから、4件の死刑判決が再審理となっている。

第四は、「世論」である。世論調査では「死刑制度に賛成」が多数となる。調査の客観性が問題とされる場合もあるが、争点はこの事実をどう受け止めるかにある。死刑存置派は、国民の素朴な正義感を尊重する立場、死刑廃止派は、国民を啓蒙して理想へ導いていく立場である。

第五は、「遺族の感情」である。死刑を廃止したら、被害者の遺族の気持ちがおさまらないというのが死刑存置派の意見である。「応報刑」や「世論」の国民感情とも重なる。一方で、「死んだ者は戻ってこない」と、犯人の更正を望む被害者の姿もある。

論題は政策論題の形をとっているが、「死刑制度は是か非か」という価値論題でもある。例えば5つの争点をそのままメリット・デメリットの形に換えて争うことになる。否定側は、凶悪な犯罪の例を具体的にあげると強い印象を与えることができる。しかし、教室ディベートとしては注意が必要である。資料は死刑廃止の立場のものが非常に多く、肯定に有利である。

② 見方・考え方

死刑に「抑止力があるのか」「憲法違反ではないのか」「世論から見るとどうなるのか」「えん罪の可能性は」と、様々な観点から死刑制度について議論が交わされることが予想される。様々な観点をどういう論旨で一貫性をもたせるかがポイントである。自ら選んだこの論題でディベートを行い、多面的（肯定・否定の両方の立場から）に考察できるように支援する。ここで身につける見方・考え方は四つの観点から次のようになる。

ア 社会的事象への関心・意欲・態度

論題に対して関心を持ち、進んで資料・情報を収集し、ディベートでも積極的に意見を聞いたり、

発言したり、話し合ったりすることで人権と正義、国家と個人また裁判の重要性について関心を深めようとする。

イ 社会的な思考・判断

ディベートマッチのための論理的思考能力の育成により、資料の事実を通して自分の立場に立って論理的に考え、判断すること、肯定・否定の両方の立場から考察し、社会的な見方・考え方ができること、さらにディベートの結果を通して社会的な判断力が身に付くと考える。

ウ 資料活用の技能・表現

ディベートに必要な資料や情報を幅広く収集・選択し、効果的な発表資料を作成し、それに基づいて自分の考えを発言したり、討論したりするなど資料活用の技能や表現する力が身に付くと考える。

エ 社会的事象についての知識・理解

論題に対する基礎的・基本的な知識を身に付け、またそれに関する社会的事象について色々な面から理解できる。

生徒の実態に応じて役割ごとに発言の場を保障し、自己表現活動を仕組むことが、生徒一人ひとりの主体的な学習態度に結びつくと考えられる。さらに、生徒にディベートマッチを通して、論題に対する自分なりの見方・考え方をワークシートに記入させ、四つの観点からその変容を評価の視点としたい。

(2) 生徒の実態

① 学習事項に関する実態

3年の選択教科「社会」のメンバーは男子5名、女子8名の計13名である。そのため次のようなメリットがある。

- ・生徒の出番が多く、役割分担も交代しやすく、内容の充実したディベートができる。
- ・個別指導に時間をかけることができる。
- ・公開ディベートへの意欲付けもしやすい。

週1時間の授業で積極的な生徒が多く、真面目に取り組んでいる。3名は意図的に支援を行う。公開ディベートマッチは今回で2度目である。前回は論題「日本は選挙権を18歳からにすべきである」で合唱祭のステージで実施した。

「…私はどちらが勝つか、負けるかというその理由をAさんと考えました。非常に勝負をつけるのは難しく、大変でした。両方の立論・質問応答・反論・最終弁論の内容をもとに、勝負をつけました。どちらも今まで以上に討論が成り立っていたし、見ていてとても楽しかったしとにかく良かったです。…」

支援を意図的に進めた審判をした生徒の作文のである。このディベートマッチで実は審判が一番心配であったが、判定もその理由も論旨がしっかりとっていて驚いた。またもう一人の審判をした生徒は、ジャッジでは否定側を勝ちとしたが、アフターディベートの作文で自分では肯定である、と次のように結んでいる。

「私は肯定側の意見です。…18歳からにすると…選挙とかに対する責任が必要になって、その人が20歳になったら政治に関する考え方が深まると思います。…政治に関心がなくて投票をしなくても、今までは20歳からだったのだから、18歳、19歳の人の分が少しでも増えればいいと思います。それにやっぱり政治に参加しよう、政治のことを考えようという気持ちの方が大切だから…」

② 見方・考え方に関する実態

課題解決的な学習において、様々な資料を使いながら課題を追究していくという場合、必ずしも生徒たちはグループ別の課題追究の学習過程で論理的な見方・考え方を身につけているとはいえない。自分で設定した課題であっても生徒たちは事務的にいわゆる答えさえ探せばいいのであり、十分な調査や話し合いをしていないのが現状である。

例えば資料を丸写しにし、そのまま棒読みをしたり、課題把握があまく用語の説明で終わったりする。課題の学習内容を短絡的に判断し見つけているだけなのである。これでは論理的な考え方・見方よりも答えさえ見つければいいということになってしまう。生徒は学習過程で受け身の学習になっている。

③ 意欲・関心・態度に関する実態

「合唱祭のステージで、ディベートをしました。今まで何回か選択の授業でやりました。最初はつまらないなとか思った。でもディベートをやってみたら、なんとなく面白くて、ついでに勝ったからもうもっとうれしくて、またやったら勝ちたいと思った。いつでも自分で考えず、人に教えてもらっ

てばかりでまだやり方よく分からない。でもだんだんやっていると覚えられます。…ステージのライトがついたとたんなんか緊張して頭がおかしくなってきました。…台の前に立つとひざがふるえてきてもう大変でした。あんまりはっきり言えずに…終わってしまった。

…予想していた質問とは全然違いとても困りました。色々考えておかなくてはいけないと思いました。自分でもわかってはいたけど「やっぱり勝つのは否定だ」と、思った通りの結果でした。授業の時は2回勝ったので、負けたのはとてもくやしかった。」

支援を意図的に進めた生徒の一人が書いたアフターディベートでの作文の抜粋である。残念ながら他のどの部分にも論題に対する意見や社会的事象について書かれていない。この生徒の学習内容への知識・理解を考えれば論題についての学習内容は難しいと考えられる。ましてや「立論」で失敗して、「質問」で勝負を決められてしまった。特に注意しなければならない点は、このディベートで学習意欲をなくしてしまうことであるが、この作文の通り、より意欲的な姿勢で学習に取り組んでいる。より支援が必要になってくるが、この点が一番重要である。

3 学習指導と支援の方針

(1) 導入段階では、生徒たちの興味や関心にうったえるように、ディベートのビデオの視聴覚教材を使って生徒たちに興味を喚起し、フォーマットを確実にし、意欲付けを図り、ディベートごとに各自の役割分担を交代する。

(2) 「課題設定」の段階では、論題を公民的分野の単元別にいくつか提示し、そこから各自で興味・関心に応じた社会的事象についての論題を考え、話し合わせるようにする。

(3) グループ編成は、今回は同じ考えで相互に助け合い、協力できるように配慮し、同質集団編成にする。

(4) 「課題把握」の段階では、必修教科「社会」の内容「民主政治のしくみ」から「日本国憲法と裁判制度」「基本的人権、法と正義」「国家と個人」などの視点で立論が作成されるよう論題の「死刑制度」の定義を確実にする。

(5) 「予想・計画」の段階では、各自が主体的に物事をとらえ、思考できる力を培うとともに、これからの学びのもとになりえる一人一人に自分の考えを持つことのできる時間を保障するとともに、次にグループ活動を行いながらお互いの意見交換を大切にすることを設定する。

(6) 論題に対して論点を予想するための基礎的・基本的な理解ができるよう立論のモデルを提示し、マイクロディベートを行い、学習ワークシートを活用して考えがまとめられるように支援する。

(7) 「課題追究」の段階では、資料選択の時に、そのまま写すのではなく、その資料を「証拠資料」として選択した理由を記述することを助言するとともに、引用する場合は問題点をはっきりさせ、解決するために必要な資料としてまとめられるようワークシートを工夫し、支援していく。

(8) ディベートマッチを充実させるために「立論作戦書」ワークシートを確実に作成させ、事前に立論内容を共通理解できるようにする。

(9) チームの役割分担で、「質問」「反論」は相手の「立論」を予想し、協力して自分たちの「反論」の内容を組み立てるなど事前学習の課題を果たし、ディベートマッチに対する取り組みを確かなものにする。

(10) 「課題解決」の段階では、発表において、各班内で協力してディベートマッチが行えるようフローシートを工夫し、また各班でお互いの考えを認め、自分たちが調べた視点以外から課題解決の共有化を図るとともに、より追究を深めるきっかけにしたい。

4 目標

必修社会科の学習内容を基本に論題を設定し、追究するディベートを通して、社会的事象に関する知識や学び方、社会的な見方・考え方を身に付けるとともに関心を深める。

5 評価規準

(1) 社会的事象への関心・意欲・態度

理解を深めていける論題を作成し、読み物資料やインターネットなどで意欲的に資料や情報を収集し、積極的に意見を聞いたり、発言したり、話し合ったりしようとしている。

(2) 社会的な思考・判断

論題に対して肯定・否定の両面からの見方や考え方を踏まえて、自分の考え方を多面的に見ることができる。

(3) 資料活用の技能・表現

ディベートに必要な資料や情報を幅広く収集・選択し、効果的な発表資料を作成できる。

(4) 社会的事象についての知識・理解

論題に対する基礎的・基本的な知識を身につけている。

6 学習計画（12時間予定）

学習過程	主な学習活動 ----- *【 】内は、学習形態 （ ）内は、扱い時間数	主体的な活動を促す 支援・手だて	評価項目と方法 ----- *①～④は、評価の観点 []内は、方法
学習目標把握	<ul style="list-style-type: none"> ・学習目標を知る。 ディベートにチャレンジ！ —社会問題をディベートで考えよう— ・第2回公開ディベートを行うことを知る。 <p>【一斉】（1）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習目標を提示する。 ・2月13日に二度目の公開ディベートマッチをすることと今回は論題やグループ（肯定・否定）を自分たちで決めることを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ①進んで話し合い、意見を発表している。 ④論題の案を考えている。 <p>[観察・発表]</p>
課題設定	<p>「論題の決定」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合いで「論題」を決定する。 ・論題『日本は死刑制度を廃止するべきである』 <p>【一斉】（1）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「論題」を公民的分野の単元別にいくつか提示して生徒自ら設定するためのモデルとする。 ・全員の話し合いで、自分の意見（肯定・否定）を反映した論題とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ①論題作成の話し合いに積極的に参加している。 ④自分の意見で論題を作成している。 <p>[観察・発表]</p>
課題把握	<p>「論題の定義・プラン」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論題の「死刑制度」の「定義」をする。 ・肯定側の「プラン」を検討する。 ・「立論」のメリット、デメリットを考える。 <p>【一斉・班別】（1）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・論題は必修教科「社会」の「民主政治のしくみ」の学習内容であることを説明する。 ・論題について説明し、論点ごとにデータを収集する方法を考えさせる。 ・「立論」のアウトラインとしてモデル案を提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ②各自や班における話し合いで「死刑制度」について考えられる。 ④「論題」の「定義・プラン」を検討している。 ③「立論」のラベルを考えている。 <p>[ワークシート・発言]</p>
予想・計画	<p>「ブレインストーミング」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「プラン」から発生する「メリット・デメリット」について発表する。 ・何を調べるとよいのか、調べたことから何が言えるのか自由に話し合い計画を立てる。 <p>【班別】（1）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・論題の「定義・プラン」は検討済みであるから、争点は「社会的な利益」である「メリット・デメリット」を発表すればよいことを伝える。 ・「ブレインストーミング」をすることによってリサーチの視点を見つけられるようにする。 ・審判、司会等の係もどちらかに協力するように指示する 	<ul style="list-style-type: none"> ③肯定側「メリット」否定側「デメリット」として「ラベル」を発表している。 ①グループの中でリサーチのための話し合いをしている。 ②「メリット・デメリット」からリサーチの視点を見つけている。 <p>[発表・ワークシート]</p>

追 究	<p>「マイクロディベート」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リサーチの前に短時間のディベートを行う。 <p>【班別】（1）</p> <p>「リサーチ（調査）」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで「肯定・否定」の立論作戦書を作成する。 ・肯定側・否定側それぞれ想定質問・応答・最終弁論シート等を作成する。 <p>【班別・個別】（3）</p> <p>「マイクロディベート」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公開ディベートに備え最終確認をする。 <p>【班別】（1）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「定義・プラン」を確認するとともに、話がかみ合うよう論旨を修正する。 ・グループでの調査活動と資料収集で論題を追究させる。 ・自分の立場の考えの裏付けとなる証拠資料を見つけるために調べさせる。 ・インターネット検索やアンケート調査等、情報収集の方法を工夫させる。 ・「質問・応答」「反論」を特訓する。 ・審判のジャッジの方法・視点を強化する。 	<p>①②「ディベート」に興味をもって、論題を追究しようと姿勢がみえる。</p> <p>[観察]</p> <p>①グループで協力して積極的にリサーチをしている。</p> <p>③論題に対して自分の考えの裏付けとなる資料を探することができる。</p> <p>[ノート・ワークシート]</p> <p>③④論題に対して基本的な知識を身に付け、証拠資料に基づいて話し合いをしている。</p> <p>[発言・ワークシート]</p>
	<p>「ディベートマッチ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・司会進行・立論・質問応答・反論・最終弁論・判定の各場面において自己の役割を果たす。 ・審判は判定結果と理由を発表する。 ・全員が自己評価・相互評価カードに記入する。 <p>【班別】（1）本時</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・リサーチや既習の学習内容をもとに相手の意見を聞きながら、自分の考えのまとめをうながす。 ・課題解決への思考の進めをうながす。 	<p>①②④「死刑制度」について理解し、肯定・否定の観点から論題に対して積極的に自分の考えを発言する。</p> <p>[発言・学習シート]</p>
決	<p>「アフターディベート」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習のまとめ ・評価 <p>【一斉・個別】（2）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・論題について自分なりの考えをワークシートにまとめさせる。 ・討論の進め方や表現活動を自己評価・相互評価させる。 	<p>②論題に対して肯定・否定の両方の立場から考察し、多面的な見方や考え方ができる。</p> <p>[作文・ワークシート]</p>

7 本時の学習

(1) ねらい

ディベートマッチを通して、調べた学習成果からグループで協力し、相手側と弁論の論理性や説得力を競いながら、基礎的・基本的な学習内容を理解するとともに、人権と正義、国家と個人について関心を深めることができる。

(2) 準備

教科書、公民資料集、公民用語集、ワークシート、記録用紙、判定表、評価表、タイマー等

(3) 展開

学 習 活 動	単 元	指 導 上 の 留 意 点 と 支 援	評 価 項 目
1 ディベートの準備 ・司会、記録、時計の打ち合わせを行う。	5	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の意見を良く聞き、自分の考えと比較しながら考えさせる。 ・発言は感情的にならずきちんとした論点で 	①②論題について自分の考えを持ち積極的に参加

<ul style="list-style-type: none"> 肯定側、否定側は発表者を中心に主張の論点をまとめる。 	分	<ul style="list-style-type: none"> 行うように説明する。 審判は両方の意見を良く聞いて判定を行わせる。 	<p>しようとしている。 [観察・ノート]</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 論題「日本は死刑制度を廃止すべきである」 </div>			
<p>2 ディベートマッチを行う</p> <ul style="list-style-type: none"> 開会 注意事項の説明 <p>(1) 立論を述べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○肯定側 ○否定側 <ul style="list-style-type: none"> それぞれ班の代表が発表する。 <p>(2) 作戦タイム</p> <ul style="list-style-type: none"> 班毎に質問事項を話し合う。 <p>(3) 質問と応答をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○否定側から肯定側 ○肯定側から否定側 <p>(4) 作戦タイム</p> <p>(5) 反論</p> <ul style="list-style-type: none"> ○否定側 ○肯定側 <p>(6) 最終弁論</p> <ul style="list-style-type: none"> ○肯定側 ○否定側 <ul style="list-style-type: none"> 閉会 	<p>30分 2分 3分 3分 3分 2分 2分 3分 3分 3分 3分 3分</p>	<ul style="list-style-type: none"> 司会の進め方は必要に応じて助言する。 必ず時間は守らせる。 立論のラベルは事前にカードに記入させる。 発言内容については、必要に応じて記録用紙にメモを取らせる。 ディベートの中で適宜、生徒の発言内容、聞き方、記録状況等を確認する。 立論に対する審判の評価はラベルが社会的利益につながるかどうかを判定表に記入させる。 質問は相手側の考えを認めながらも、自分達の正しさを主張するために、不備な点をつき、議論がかみ合うように留意させる。 同じ内容の質問を繰り返さないように留意させる。 相手の論拠を崩しながら反論させる。 これまで主張してきた範囲内で、自分達の立場を最も有利にする点や最も強く主張したい点を中心に論を組み立て、自分達の立場が正しいことを主張させる。 多くの賛同を得るように堂々と発表できるようにさせたい。 	<p>①③事前に準備した資料をもとに表現が出来る。 [観察・発言]</p> <p>①②相手の意見と自分の考えと比較し、事前に準備した資料にそって発表したり話し合いに参加できる。 [発表・観察]</p> <p>③班内で協力しながら自分の役割を果たそうとする。 [観察]</p> <p>②④ワークシートに自分なりの理由が書ける。 [ワークシート]</p>
<p>(7) 判定をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 審判は、判定表に最終弁論に対する評価を記入し、結果を集計する。 判定結果と理由を発表する。 	10分	<ul style="list-style-type: none"> 判定が審判の個人的な意見ではなく各側の発言をよく聞いたうえで公平に判定されるようにする。 審判に発表させる。 	<p>②論題に基づいて論拠をもとに肯定か否定か表明できる。 [判定表・発表]</p>
<p>3 評価表の記入をする。</p> <p>4 先生の話聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ディベートの講評を聞く。 	5分	<ul style="list-style-type: none"> 自己評価させる。 今日のディベートについて、ディベートの技術とともに論題についてどのようにとらえているかということにも目を向けて講評をする。 	<p>④論題に対する社会的事象についていろいろな面から理解できる。 [自己評価]</p>